

東京バッハ合唱団 月報

[第 701 号] 2020 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 701

November 2020

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

“しろと”の思い

権力者は異常な人間性に気づかない

大村 恵美子 (主宰者)

ひとが成長して専門家になると、円満になるよりも、とんだ非常識家になることがよくあります。頭がすぐれているのに、どうしてこんなに不幸なことになるのに気づけないのだろう？ と、不思議になるのです。

世界的コロナ禍の現状で、私たちは当面、活発な動きをすべて抑えられ、そのおかげで、普段よりも思索的になっています。地上にある国々の、指導者(為政者)対民間人の関係も、一般ニュースでしか教えられない私達のようなものは、ついそんなものかと短絡的に受けとってしまうのですが、実際には勿論、それぞれの国のリーダーの出方によって、一般国民の生活程度は、あらゆる面で異なってきます。

私たち日本に住むものは、何かと従順で、ぶつぶつ不平をかわしあったり、川柳などに表現して自嘲して慰めたりし、なかなか徒党を組んでデモで氣勢をあげたり、破壊行為で不満を相手に見せつけたりしません。“おもねり”(おもてなし、ではない)、“そんなく”、“見逃がし”等々、どちらかと言うと目上のものへの“へりくだり”、“たてつかず”、“目立たず”の態度をとって、自分個人への外からの制裁を避けてきました。

よく表現すれば、穏和・寛容・こじれを避ける、といった、おとなっぽい余裕とも考えられましようが、自己主張の代りに、罰を蒙らないように、居場所を失わないように……想像すれば、自分は悪くないのに、追いこまれて死に直面しながら日々をすごすしかない〈難民〉の気持ちでしょうか。

はるか昔の、私の幼年時代にも、2歳違いの姉は泣き虫、私のほうは、叱られそうになると相手にとり入

るようにヘラヘラ笑って、親からは「いいから行きなさい」と早々許される口。姉のほうは、自分の気持ちにこだわって、いつまでも怒り泣きを続けていました。おとなからすれば、妥協の早い私のほうが楽で、解決の見えない姉のほうが、面倒な相手だったでしょう。

子供時代にも、現在の一般人生活にも、何とか両方を平等に判断してくれる、裁判者はないものか、と切望してやまないわけです。でも、どんなに常識的で公平を心がけている人間でも、世の中を知れば知るほど、その裁判者そのものでさえも、謝礼をより多く出すほうとか、より感じのよく美しいほうの味方になるとか、態度をすぐに変えてしまう、たよりない存在だということがわかってくるので、どうしようもない——。

そういうやりきれない局面に多く遭遇して、自殺する気の毒な人たちも現れます。とにかく、厄介なことが私の前途の歩みにふりかかりませんように、と、子どもの小さい胸を痛めながら、私たちは、なんとか成長してきたのです。

いまの世相を見ても、自分が得するように頭を使えば、そのおかげで損を背負いこむ人たちがたくさん出来る、でも「何、かまうものか、生きるが勝ちよ」と開きなおって生きる人間が、余りの露骨さにはじめは驚かれ、批判されるが、やがてそれも承知ですり寄ってくる人々に受け入れられ、尊敬されたりもする。

いやなことを、くたたくあげて来ましたが、私にはどうも、当然期待されるような、暖かい人間性が、われわれ一般人の間に、いつのまにか消え失せてきているのではないかと、そう感じられることが、日常的に多くなったと思えるのです。

古典とされている書物を、細々ながら読みつづけるのも、私の読書生活のしきたりですが、たまたま今は、『日本書紀』を読んでいて、日本の天皇の初期からの報告書のように感じています。あらためて驚くのは、登場する実在した(?)人間たちのあいだに、殺人事件の多いことでした。そこで、どんなことで人間は他



■晩秋の木々 (写真: 千葉光雄. p.3 も)

月報 2020 年 11 月号 CONTENTS

- ・オンライン特別演奏会、BWV110の歌詞と解説…p.2
- ・国連は、パレスチナは、難民は？(大村恵美子)…p.4
- ・おたより(森井 眞)…p.4

人を殺すことになるのだろうか、ちょうど現在、コロナ禍のせいで比較的時間に余裕の出来た生活をしているので、おなぐさみの遊びどころで、『日本書紀』に出てくる殺人事件の数を、数えてみました。同時に知ったことは、日本の歴史の早い時代から、中国と朝鮮、この2国との接衝が、とても深かったのだという史実です。大陸に存在するこの2国は、日本にとっては先輩的存在で、何でも重要なことを、教えてくれたのに、段々と日本が成長するにつれて、一人で立派になったような態度で、日本人はこの2国を、さげすんだ眼でも見るようになってくる。このような恩知らずな心を、私はとても恥ずかしく思うのです。

さて、その『日本書紀』中の殺人事件ですが、これは私だけの好奇心から目をつけたことで、それについて発表したり報告したりすることは考えてもいませんが、ただ〈人間〉を知る上で、殺人の動機を探ってみたいと思ったのです。

岩波文庫で5冊に分けてありますけれど、日本国内で起きたものだけを対象に、また国内でも日本人ではなく、中国人や朝鮮人など外国人同士の事件は対象外にしました。すると、文庫の5冊目（天智朝から持統朝、7世紀後半）になると、ほとんど殺人事件はなくなってしまっているのです、それだけで、私は内心ほっとし、喜んだ次第です。殺人の内容真相、その分類など、これからあれこれしっかりと考える段階にあります。私がどんな場合にも言いたいのは、人間は他人の体に害を与えたり、殺したりすることを、いかなる理由からしても禁じなければならないということです。当たり前なことなのに、どうしてそれが、いつまでも実現しないのでしょうか。〈了〉

YouTubeにて12月19日（予定）より公開

東京バツハ合唱団 特別演奏会

[無聴衆・オンライン・無料]

以前よりご案内してきたとおり、このたびのオンライン演奏会は、新型コロナウイルス感染拡大のために中止となった「東京バツハ合唱団第119回定期演奏会」の代替企画です。さいわいにも杉並区の助成と後援を得て開催が可能となりましたが、収録にあたっては、感染予防対策として、考えられる限りの工夫を凝らさなければなりません。

今回ばかりは、大げさでなく、人の命がかかっていますので、素晴らしい音楽を実現したい、良い演奏をみなさんにお届けしたい、という思いだけでは許されないのです。吐く息にのせて表現する合唱行為は飛沫を避けられない。また、限られたスペースでは、各演奏者間の距離の確保が困難。このような障害のなかで、いかに演奏者の密と時間の停滞を避けるか、楽曲の演

東京バツハ合唱団 特別演奏会
[無聴衆・オンライン・無料]

J.S. バッハ曲（日本語演奏）
カンタータ第110番《喜び 笑い あふれ》BWV110
《クリスマス・オラトリオ》（I-III部）BWV248

[演奏者]

テノール：平良栄一（アリアと福音史家）
室内楽：ARS有志
オルガン：中澤未帆
合唱/斉唱：東京バツハ合唱団
指揮/訳詞：大村恵美子

[収録] 2020年12月5日、6日

[会場] 日本キリスト教団荻窪教会

(無聴衆。関係者以外のは、ご遠慮ねがいます)

[制作技術] ㈱パラビジョン

[助成] 杉並区新しい芸術鑑賞様式助成事業

[後援] 杉並区

[公開] YouTubeにて12月19日より（予定）

[チャンネル（短縮URL）] pr1.work/1/bct

このチャンネルにて、すでに東京バツハ合唱団の過去の演奏の配信実験をはじめています。特別演奏会の確定公開日は、当チャンネル、または合唱団HPなどでご案内します。

なお、後援会員の皆さまには、同内容の録画DVDを贈呈する計画です。多めに制作して“オンライン”の苦手な読者の皆さまにもお頒けできれば、と思っています。

奏順や出演者の配置までも大幅に入れ替えながら、ギリギリの実現を目指しています。

どんな仕上がり画面になるのか、見当もつきませんが、出来あがるのは、紛れもなく《カンタータ110番》であり、《クリスマス・オラトリオ》の前半3部のはずです。配信の画面が、クリスマススの喜びに満たされますよう努めます。ご期待ください。

《クリスマス・オラトリオ》は、最近もなんども取りあげてきましたので、よくご存じと思われます。

《カンタータ110番》は、1997年の第82回定期演奏会以来の久々の上演ですので、この機会に、歌詞と曲のご案内を載せておきます。あらかじめお目をお通しいただければ幸いです。

カンタータ第110番《喜び 笑い あふれ》

Unser Mund sei voll Lachens BWV110

大村 恵美子・訳詞／解説

<歌詞>

1. 合唱

喜び 笑い あふれ
口は 讚美に 満つ
主 いま 大いなる みわざ なせり

(詩編 126:2-3)

2. アリア(テノール)

心よ 思いよ
いでゆき 舞いのぼれ
届け み空に
神の いま 果たせる みわざを 思え
み子 人となりて
われらを 神の子と なしぬ

3. レチタティーヴォ(バス)

たぐいなき 主よ
なれと なが み名 貴(とうと)し
みわざは そを 示す

(エレミヤ 10:6)

4. アリア(アルト)

いかなれば なれは
われらを 求むるや
主の 呪(のろ)いし もの
黄泉(よみ)に ありし とき
愛もて 世継ぎと
呼びなしたまえり



(ルカ 2:14)

5. 二重唱(ソプラノ/テノール)

栄えは いと 高き 神に
地に 平和
人に 喜び あれや

6. アリア(バス)

目覚めよ 血潮よ 手よ 足よ
喜びの 歌 うたえ
神の めでたもう 調べを
祈り 秘めたる 琴よ
そなえよ ほめ歌を
心も たまも 浮きたつ 調べを

7. コラール

アレルヤ たたえよ
心の かぎり 歌えよ
主は いま なしたもう
とわの 喜びの みわざ

(Kaspar Fügler, 1592)

<解説>

〔初演〕1725年12月25日(クリスマス第1日), ライプツィヒ。

〔歌詞〕台本全体は、レームス(G. Chr. Lehms 1684-1717)の詞によるが、神の子誕生の福音書記事(ルカ2:1-14)からは、天使の合唱(2:14)がとり入れられるだけで、あとは旧約聖書から2か所、神の大きなわざの讃美が主題となり、冒頭合唱曲の、スケールの大きい管弦楽組曲第4番からの転用をはじめ、終始、広大無辺の雰囲気支配される。

〔編成〕独唱SATB, 合唱, トランペット3, ティンパニ, フルート2, オーボエ3, オーボエ・ダモーレ, オーボエ・ダカッチャ, 弦合奏, 通奏低音。

1. 合唱

《管弦楽組曲》第4番BWV1069の序曲に合唱を組み入れたもの。前・後奏の2分の2拍子の緩徐部分はオーケストラだけで枠組みをつくり、中間部の速い8分の9拍子で、合唱が「笑いはわれらの口に満ち」(詩編126:2)という聖句をそのまま、哄笑がとめどもなく溢れ出すように、全声部にひろがりわたる。

2. アリア(テノール)

2本のフルートと通奏低音が前・後奏でたつぷりと流れ、テノールが、神の子の地上での誕生というみわざを受けて、天空に届くまで、心よ舞い昇れ、と歌う。

3. レチタティーヴォ(バス)

短い5小節のレチタティーヴォ。弦合奏をともなつて、エレミヤの聖句をそのまま示す。

4. アリア(アルト)

オーボエ・ダモーレをオブリガート(独唱旋律を引き立てる助奏パート)楽器として、アルトが、信じがたいほどに深い神の愛で世継ぎとされた人間の感動を、ゆつたりと歌う。

5. 二重唱(ソプラノ/テノール)

ここだけが、クリスマスを端的に表現する曲で、《マニフィカト》初稿(1723年)BWV243aから編曲されている。オルガンと通奏低音のみの伴奏で、ソプラノとテノールの2つの旋律が、かけ合うように、有名な「グロリア」(天使の讃美、ルカ2:14)をくりひろげる。

6. アリア(バス)

4つあるうちの最後のアリアは、凱旋歌のように心を引き立てるバスと、トランペット、オーボエ2本、オーボエ・ダカッチャ、弦合奏・通奏低音の力強いオーケストラとで、この日の喜びを華々しく表現する。

7. コラール

フューガー作「われらキリストの徒」(Kaspar Fügler „Wir Christenleut“ 1592)の第5節。第6曲のオーケストラにフルート2本も加わって、単純な4声体コラールだが、〈アレルヤ〉で始まる歓喜をもって全曲が締めくくられる。《クリスマス・オラトリオ》第3部の終り、第35曲にも用いられているコラールで、親しみ深い。

(CD選集『バッハ・カンタータ50曲選』No.33の解説より転載)



国連は？ パレスチナは？ 難民は？

大村 恵美子（主宰者）

私が「世界史」の本を読んだ最近の記憶は、次の1冊である。ジェフリー・ブレインニー著、南塚信吾監訳『小さな大世界史——アフリカから出発した人類の長い旅』（ミネルヴァ書房、2017年出版。A Very Short History of the World, Geoffrey Blainey, Penguin 2000）

今年2020年は、国際連合創立75周年で、現状といえば、米・露・中の超大国が自国の利益上、国連から抜け出ようとし、フランスの評論家E. トッドは、それらに代わってドイツが突出しようとしていることを、くり返し指摘している。アメリカにべったりの日本は、今やアメリカからは、物をどんどん買うポチとみられている。

例によって、私はまた就寝中、夢を見た。東京バッハ合唱団が、主宰者である私のあずかり知らないうちに、新しく発見されたJ.S. バッハの《受難曲》（あまり長すぎない、ゆったりした作品。もちろん今のところ、ない）を、堂々と公演している夢だった。私はそれを初見で指揮しながら、またもや、同時代人のことも、自分にはほとんど解からない、と痛感していた。

現代史の中で、国際連盟が潰れて、新しく国際連合が成立し、それも今や世界中で放置されて、難民も至るところにばらまかれているのが現状だ。

私も、「あちらこちらの現場を、自分のこの目で見て来た」という報告者の話を聞かされて、それぞれに利益の一致している処が生かされ、どうでもいいと見放された処の人々は、難民となって見捨てられているのを感じているところ。私自身はもう超高齢者で、何の役にも立たないと諦めかかった存在である。地球は、気温の具合、天災の具合その他で、いつ消えてしまうか……という危険状態。日々のニュースを知らされる世界中の一般人は、自分の主張を発表することもなく、「仕様がないなあ、いったいどこに落ち着くのやら」と、他人ごとのような態度。

私は、18世紀に生きた音楽の達人、J.S. バッハの、潤沢な作品を、60年近く、合唱団で演奏し続けている。このバッハの音楽は、永久に私たちの讃歌が消えないことを前提としたものだ。

世界のニュースを視聴すると、ニュースヴァリューの低いものは、どんどんとり上げられなくなって、新しく力強く現れるものばかりを追いかけているようだ。私たちはどうすればよいのか？ 私はこう考える——派手な情報ばかりを無意識にとり入れず、個人々々の判断で正しいと思えるものに対しても、自分の責任で行動してゆこう。

シリアの難民は、パレスチナの国民は、毎日どうしているのか？ 国連は知らぬ顔をしないで、そういう惨状に放置された人々を、敵・味方の色分けをせずに、救命してゆこう。人類をまともにどこにでも生活させ

お・た・よ・り

秋ふかし！

くれぐれも御自愛の上、まだまだお元気で
おくらして下さい。心から祈っております。

絶望的な世界の現実！ 人類は一体どうなる
のでしょうか。

そんな現実の中、凶々しくもぼくはまだ生
きようとして（自信はありませんが）、食欲
もあり、毎日、二・三百歩あるかせてもらっ
ています。

どうぞお元気で！

一筆ご報告まで

二〇二〇・一〇・二四 森井 眞

森井 眞先生は、上の日付けに、満101歳をお迎えになりました。団員のみなさまと一緒に、白寿のお祝い（アルカディア市ヶ谷、2018/10/11）をしてから、まる2年が経ったんですね。

上掲は、原稿用紙にお書きになって、雑誌「世界」に挟まれていたもの。毎月、ご自分が読み終わるとすぐにご連絡があり、お借りに上がったものでしたが、最近はお散歩をかねてわざわざお届けくださいます。この日の早朝も、紙袋に入れて拙宅のドアノブに提げてありました。「2,3百歩」（上記）と言うわけには行きませんので、奥様がおクルマでお連れくださるのでしょうか。

世田谷区桜上水の森井氏宅から出発して、この7月で58年、「東京バッハ合唱団」も、半世紀以上続いてきました。明治学院大学の長い学長勤務を終えられてからも、ずっと反戦運動の第一線リーダーとして大きな声で活躍していらした森井先生。武器としての核使用が常識のように世界に出回っている現状に、まだまだ私たち平和主義者の希望でありつづけていただきたいと、心からご期待申し上げます。（大村恵美子）

る、この1点に目標を絞って、私たちの人生を統一させよう。いつ滅びるのかなどの雑念を排して、生きる喜びをたっぷりと創って暮らそう。

コロナの蔓延という、思いがけない災難が現実化して、人類はあわてたが、今さら気づくまでもなく、歴史上、始めの頃から、コレラ・ペスト・インフルエンザ等々のはやり病に襲われて、根だやしになるかと恐れ（ながら）、私たちは一生を満たして来た。

衛生観念は徐々に発達するだろうが、いつの場合にも、私たちは投げやりにならず、ただ運を天に任せてあつけらんかとせず、この美しい地球上の生を、明るく気持ちで、感謝しながら、たのしく生きてゆこう。芸術は、そのための応援団である。<ア>